

英語の代用表現 **do so** の統語的・意味的特徴

主濱 祐二

1 はじめに

英語の代用表現 **do so**¹は、一般に、「統語的に V または VP として構成素を成す要素を代用する」という特徴を持つことが知られている。

(1) a. Delia promised to write to Joe, so she'll do so as soon as possible.

b. People who deceive us once are capable of doing so again.

do(ing) so は、(1a)では動詞句 *write to Joe* の、(1b)では *deceiving us* の代用として機能している。

従来、**do so** による代用の成否については、主に生成統語論の枠組みで、VP の内部構造の分析に基づいた説明が試みられてきた。しかし、実際に **do so** が用いられている様々な文を観察してみると、従来の分析では十分に説明できない事例が多くあることが分かった。例えば(2)では、**do so** による代用を受ける先行詞が VP として構成素を成していない。

(2) a. Since cell phone numbers could be added to the list, I did so at that time.

[did so=added cell phone numbers]

b. The clothes don't dry on rainy days, but my mother does so inside with a heater. [does so=dries the clothes]

本稿ではこのような現象を取り上げ、英語の代用表現 **do so** の統語的・意味的特徴について考察する。

2 先行研究

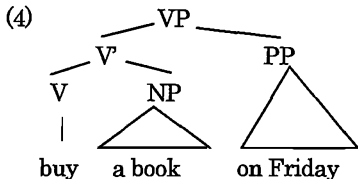
2. 1 **do so** の統語的性質

ここでは、生成統語論での **do so** 代用の理論的説明について概観する。これまでの研究では、**do so** は動詞句の構造を判別するテストとして用いられており、**do so** で代用可能な要素は VP の内部にあると判断される。例えば Poole (2002) は、「**do so** は V または VP を代用する」と仮定し、(3)と(5)の VP の構造をそれぞれ(4)、(6)であると考える。

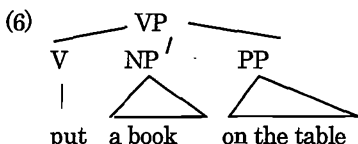
(3) a. Joe will buy a book on Tuesday, and Sam will do so on Friday.

(Poole 2002: 41)

b.*Joe will buy a book on Tuesday, and Sam will do so a newspaper. (Ibid.)



(5)*Mary put a book on the table and Bill did so on the chair. (Ibid: 42)



(3)から、do so は V(buy a book)を代用することはできるが、V(buy)のみを代用することはできないことが分かる。また、(4)からは、たとえ V NP(put a book)であっても、それらが全体で一つの構成素を成していなければ、do so で代用することができないことが分かる(したがって、VP 全体(put a book on the table)を置き換える Mary put a book on the table and Bill did so.は非文でない)。

もう一つの統語的特徴は、「do so は文中に必ず顕在的な先行詞を持たなければならない」ということである。この点について、do so と do it は異なる振る舞いを示す。

(7) a. [Hankamer attempts to stuff a 9-inch ball through 6-inch hoop]

Sag: It's not clear that you'll be able to do it. (Hankamer and Sag 1976: 392)

b. [Hankamer again attempting to pass 12" ball through 6" hoop]

Sag#I don't think you can do so. (Ibid: 418)

Hankamer and Sag(1976)によると、do it が語用論的に周囲の状況から指示対象を決定することができるのに対し、do so は周囲の状況から指示対象を決定することができない。Hankamer and Sag は、do it のように語用論的に指示対象を決定できる照応形を深層照応(deep anaphor)、do so のように統語的に顕在的な要素を指示対象とする照応形を表層照応(surface anaphor)として区別している。

2. 2 do so の意味的性質

do so の意味的な性質として、「状態を示す動詞は do so で代用することができない」ということが知られている。

(8) a. *I expected him to know the answer, and he did so.

(Hankamer and Sag 1976: 417)

b. *I expected the number to divide evenly by 17, and it did so. (Ibid.)

do so で代用できない動詞には、連結詞の be, seem, appear, feel, hear, want, think, own, have, inherit などがある (安井・中村 1984)。do so が状態動詞を代用することができない理由については、安井・中村(1984)によると、「do so の構成要素の一つである do が代理動詞としてもっている性質が do so に引き継がれている」(pp.166-167)からであると考えられている²。例えば What are you doing? という問いに対しては、どんな動作動詞を用いても答えられるが、状態動詞を用いて I know that answer. と答えることはできないため、do はすべての動作動詞を代理する性質をもつと考えることができる (cf. 江川 1998)。

3 do so による代用の実例

この節では、do so による代用の実例を見ながら、その用法を観察する。以下で提示する実例は筆者による作例の他、英字新聞の記事やウェブサイトから抜き出したものであるが、いずれもインフォーマント³によるチェックを受けたものである。

3. 1 受動態

以下の例(9)～(10)では、主語名詞句と過去分詞が do so で代用されている (代用を受けている要素をイタリック体で表示)。

(9) Further, since *cell phone numbers* could be *added* to the list, I did so at that time. [did so=added cell phone numbers]

(<http://www.ftc.gov/os/comments/tsrcallabandon/OL-108563.htm>)

(10) Only I, X, C, and M can be *repeated*; V, L, and D cannot be, and there is no need to do so. [do so=repeat V, L, and D]

(<http://www.math.nmsu.edu/~pmorandi/CourseMaterials/RomanNumerals.html>)

(10)では、V, L, and D cannot be の後に repeated が省略されているが、その repeated と主語名詞句の V, L, and D が do so により代用されている。

3. 2 非対格構文

非対格動詞(unaccusative verb)とは、本来他動詞の目的語であるべき要素が、自動詞の主語となって生じることのできる動詞のことである(cf. Burzio 1986)。(11)を例にとると、The clothes don't dry の主語である the clothes は、dry を他動詞で用いた場合、dry the clothes のようにその目的語として現れることができる。

(11) *The clothes don't dry on rainy days, but my mother does so inside with a heater.* [does so=dries clothes]

(12) a. *The remaining snow melted quickly; the sun did so in only an hour.*
[did so=melted the remaining snow]

b. *The remaining snow melted quickly; my father did so with a big heater.*
[did so=melted the remaining snow]

(12)の did so について、(a)はその主語(the sun)が無生物であるが、(b)はそうではない。主語の有生性にかかわらず、どちらの例においても did so による代用が可能である。

3. 3 動名詞構文

(13)は need + 動名詞、(14)は be 動詞 + worth + 動名詞の例である。

(13) *Joe's shirts needed ironing, so Delia kindly did so for him.*
[did so=ironed Joe's T-shirts]

(14) All in all, and as a conclusion, I think *this film* is worth *watching*, and I recommend you to do so if you believe you can stomach the violent parts in order to eventually understand the message beneath them. [do so=watch this film] (<http://www.amazon.com/review/ROH1GSI8MOCXF>)

3. 4 名詞句

do so の代用を受ける要素はふつう先行する動詞句であるが、次例(15)では名詞句が表す行為そのものが代用を受けている。

(15) *Punctual and regular attendance at classes is expected except when a student is prevented from doing so by illness, death in the family, or a similar emergency.* [doing so=attending classes punctually and regularly] (https://www.messiah.edu/academics/advising_handbook/academic_policies/attendance.pdf)

3. 5 状態動詞

do so には「状態動詞を代用することができない」という制約があることを2. 2節で見た。しかし次例(16)では、状態動詞 **know** を含む動詞句が先行要素であるにもかかわらず、(b)では **know the answer by next Monday** の代用が可能になっている。

(16) a. *Joe *knows the secret* but Delia doesn't do so.

b. Joe told Delia to *know the answer by next Monday*, so she will do so.

以上、この節では do so による代用を受ける先行要素が①受動文②非対格構文③動名詞の構文④名詞句⑤状態動詞を含む動詞句である例について、do so による代用の実例を観察した。

4 分析と考察

この節では、前節で示した do so の実例について、統語的・意味的な観点から分析し、do so による代用が可能となる条件について考察する。

4. 1 基底構造での do so 代用

2. 1節で見たように、生成統語論では do so は表層照応の一つで、先行する V または VP を代用すると考えられている。しかし、3節で示した例を見ると、do so は表層構造に現れる統語的構成素の単位で先行要素を代用しているとは言い難い。3. 1節で挙げた例をもう一度見てみよう。

(17) Only I, X, C, and M can be repeated; V, L, and D cannot be, and there is no need to do so. (=10)

do so は repeat V, L, and D を代用しているが、この repeat V, L, and D は顕在的な構成素として表層構造に現れていない。ここで、(17)の後半部分についてその派生を考えてみると、次のようになる。

(18) a. ___ cannot be [_{VP} repeat-en V, L, and D] (基底構造)

b. V, L, and D_i cannot be [_{VP} repeated t_i] (表層構造)

受動形態素である-enにより、repeat は V, L, and D への格付与ができなくなるため、名詞句移動により表層構造で V, L, and D は主語位置に移動する(cf. Chomsky 1981)。また、repeated は前に同一の形式があるため動詞句削除を受け

る。このように受動文の派生を見てみると、do so による代用は表層構造ではなく基底構造で行われるという予測が立つ。

3. 2節で挙げた非対格構文の場合はどうだろうか。(19)は非対格動詞 melt を含み、did so は melted the remaining snow を代用している。

(19) The remaining snow melted quickly; the sun did so in only an hour.
(=(12a))

Burzio (1986)によると、非対格動詞は主語を欠く___ [VP V NP]という基底構造を持つ。これは非対格動詞の外項を欠く項構造[ϕ , <theme>]と対応している。以上のことから、(19)の前半部分は、次のように派生されると考えられる。

(20) a. [IP ___ [I past [VP [V melt the remaining snow] quickly]] (基底構造)
b. [IP The remaining snow_i [I e [VP [V melted t_i] quickly]] (表層構造)

英語ではIPの指定部を空にしておくことができないので、表層構造でV内のthe remaining snowが主語位置に移動する。do soによる代用は、名詞句移動後の表層構造でなく、基底構造で行われることが分かる。

ここまで、do soによる代用は表層構造でなく基底構造において成り立つということを見てきたが、これは3. 3節の動名詞構文の例についても同様に当てはまる。

(21) ... I think this film is worth watching, and I recommend you to do so...(=(14))

「ジーニアス英和辞典」(第4版)でworthを引くと、「The mountain is worth climbing.の場合、主語the mountainは動詞climbingの目的語にもなり、It is worth climbing the mountain.とすることができる」(p.2223)という趣旨の語法の解説がある。この説明に基づいて考えると、(21)の前半部分は次のようにして派生される。

(22) a. ___ is [AP worth [VP watching this film]] (基底構造)
b. This film_i is [AP worth [VP watching t_i]] (表層構造)

(22a)の空所に虚辞のitが挿入されると、It is worth watching this film.が派生されるが、ここでは(22b)のように名詞句移動が起こっている。do soは基底構造のVPを先行要素とし、それを代用することが分かる。

4. 2 名詞句の意味解釈と do so 代用

do so は基本的には動詞句を代用するが、3. 4 節では、代用を受ける動詞句が頭在的に現れておらず、その代わりに先行する名詞句の意味解釈に基づいて代用が行われていると考えられる例を観察した。次の例では、doing so は attending classes punctually and regularly の言い換えであると考えられる。

(23) Punctual and regular attendance at classes is expected except when a student is prevented from doing so by illness, death in the family, or a similar emergency. (=15)

英語の名詞化(nominalization)について、Dixon (2005)は動詞由来名詞類(deverbal nominal)はその元になる動詞の項(主語・目的語)を標示することができ、主述関係のある節と並行的な解釈をもつと指摘している。

(24) a. The queen slowly entered the cathedral.

b. [The queen's slow entrance into the cathedral] was wonderful to behold.
(Dixon 2005: 333)

(24a)の「様態の副詞+動詞」slowly entered は(b)では「形容詞+名詞」slow entrance, 主語 the queen は所有形 the queen's, 目的語(着点) the cathedral は「前置詞+名詞」into the cathedral とその形態を変化させているが、元の動詞 enter の項構造は entrance でも保たれている。(23)についても同様に考えると、次のようになる。

(25) a. The students attend classes punctually and regularly.

b. (the students') punctual and regular attendance at classes

4. 1 節での分析・考察を踏まえて、表層構造に現れる(25b)はその基底部となる(25a)から派生したものであるとすると、do so は動詞由来名詞類の基底レベルで動詞句を代用すると考えられ、do so による代用の仕組みを受動文や非対格構文と同様に捉えることができる。

4. 3 述語のアスペクトと do so 代用

do so には「状態動詞を代用することができない」という制約があるが、3. 5 節で見た例では、状態動詞 know を含む know the answer by next Monday を do so で代用することが可能であった。

- (26) a. *Joe knows the secret but Delia doesn't do so.
 b. Joe told Delia to know the answer by next Monday, so she will do so. (=16)

動詞のアスペクトについて、状態とそれ以外のアスペクトを区別するために、命令文でその動詞が使えるか試すことができる。次例で示すように、一般的には状態動詞(27a)は命令文で用いることができないが、動作動詞(b)や完成動詞(c)は用いることができる。

- (27) a. *Know the answer.
 b. Run.
 c. Build a house. (Rothstein 2004: 15)

このような基準である程度動詞のアスペクトを判断することができるが、アスペクトはそれぞれの動詞に固有なものであるというわけではない。アスペクトは動詞と共起する要素によって変化することがある。この点について Rothstein (2004)は以下の例を挙げて説明している。

- (28) John was curious to find out where his grandfather had been born, and with the help of the record office he knew the answer in a few hours. (Ibid: 16)

Rothstein は、*knew the answer* が *in a few hours* と共起することで、「知らない」状態から数時間で「知っている」状態に変化する(*change from a state of not knowing to a state of knowing*)という「状態変化」を表し、達成動詞の性質⁴を持つようになると述べている。次の例は命令文の例であるが、期限を示す *by* 句により述語のアスペクトが状態から達成へ変化したことで、*know* が命令文で使えるようになったと考えられる。

- (29) Teacher to student: "Know the answer by tomorrow, or there will be big trouble." (Ibid: 17)

従って(26b)についても、動詞句 *know the answer by next Monday* は状態でなく達成のアスペクトを持つと解釈されるため、*do so* による代用が可能となると考えることができる。

5 まとめ

以上本稿では、英語の代用表現 *do so* の統語的・意味的特徴について、様々な事例の観察を通して考察してきた。最後に本稿の主張をまとめると、次のようになる。

- ① *do so* は、表層構造ではなく、統語規則が適用される前の基底構造で動詞句を代用する。
- ② 先行詞が動詞由来名詞類の場合、*do so* はその名詞類と並行的な解釈をもつ節に含まれる動詞句を代用する。
- ③ 先行詞が状態動詞であっても、それと共起する要素によりアスペクトが状態以外に変化すると、*do so* による代用が可能となる。

注

- 1 本稿では *do so* にのみ焦点を当て、類似表現の *do it* や *do that* との比較は行わない。
- 2 「状態動詞は *do so* による代用を受けない」という制約は絶対的なものではない。安井・中村は、状態動詞であっても「適切な対比要素を伴って適切な位置に置かれるならば、*do so* による照応が可能」(p.167)になると述べている。

(i) While he may appear intelligent to them at first, he will do so only until he opens his mouth. (Ibid)

- 3 インフォーマントは、筆者の勤務先の ALT に依頼した。アメリカ合衆国カリフォルニア州出身の英語母語話者で、20代の女性である。
- 4 達成動詞には行為の終点があるが(境界的: telic)、継続性がない。例えば *reach a summit* は頂上に到達した時点でその行為が終了するが、頂上に「到達し続ける」ことはできないので、継続性を欠く。*for an hour* を加えた次の例からもこの性質は明らかである。

(ii) a. Joe built a bridge for an hour. (完成動詞)

b.*Joe reached a summit for an hour. (達成動詞)

参考文献

江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』, 金子書房.

原口庄輔・中村捷 (2001) 『チョムスキー理論辞典』, 研究社.

安井稔・中村順良 (1984) 『代用表現』, 研究社.

Burzio, L. (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Dordrecht:

D. Reidel.

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

(安井稔・原口庄輔 (訳) (1986) 『統率・束縛理論』, 研究社.)

Dixon, R.M.W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford University Press.

Hankamer, J. and I. Sag (1976) "Deep and Surface Anaphora," *Linguistic Inquiry* 7-3, 391-428.

Poole, G. (2002) *Syntactic Theory*. Palgrave.

Rothstein, S. (2004) *Structuring Events: A Study in the Semantics of Lexical Aspect*. Blackwell.

ジーニアス英和辞典 (第4版), 大修館書店.

(平成 19 年度修了生、岩手県立盛岡北高等学校教諭)